

旧帝国ホテルの解体から移築に関する研究

A Study on Relocating and Reconstruction the Former Imperial Hotel

工学院大学建築学部 准教授 大内田 史郎

(研究計画ないし研究手法の概略)

フランク・ロイド・ライト(1867-1959)の設計による旧帝国ホテル(1923-1968)は1923年に竣工したが、客室数の少なさや老朽化の問題から1967年に建て替えが発表され、1968年に解体された。その解体に対し保存運動が展開され、解体直前に中央玄関部のみが愛知県犬山市の博物館明治村に移築されることが決定したが、その解体から現在の姿に至るまでには実に17年間もの歳月を要している。本研究は資料調査やヒアリング調査などを通して、解体・移築の全貌を明らかにすることで、博物館明治村の初代館長であった谷口吉郎(1904-1979)らが提唱した「様式保存」という方針に対する具体的な方法を明らかにすることを目的としている。

これまでに早稲田大学の明石信道(1901-1986)が中心となって行った解体時の実測調査に関する記録資料と旧帝国ホテルの中央玄関部の移築に伴う主な解体材料と復原材料についてまとめたが、本研究では移築に至る保存運動の経過に関して各団体の運動を踏まえた上で、それら諸運動のなかでも、工学院大学武藤研究室（主に実測図面）と早稲田大学明石信道研究室（主に解体時の写真記録）の活動を調査しまとめた。

(実験調査によって得られた新しい知見)

1. 旧帝国ホテル解体時の保存運動の経過について

まず、旧帝国ホテル解体時の保存運動の経過に着目して、株式会社帝国ホテル、日本建築学会、帝国ホテルを守る会、博物館明治村、そして幾つかの大学が、旧帝国ホテルの解体という問題にどのように反応し活動したのかについて、文献調査や当時の関係者からのヒアリング調査によって得られた情報を団体ごと整理した。さらに、本研究の過程で明らかになった当時の工学院大学による実測調査について詳しく述べる。

1.1 株式会社帝国ホテルの動き

旧帝国ホテルの保存運動は、旧帝国ホテルを取り壊して新しい高層ホテルを建設するという計画に関して、1967年3月16日に朝日新聞が報じたことに幕を開ける。実際にホテルの老朽化も著しく、株式会社帝国ホテルは当初から解体・建替えの意向は強かった。しかしながら、後述する「帝国ホテルを守る会」をはじめとする建築家や専門家から寄せられる多くの保存に関する意見や、博物館明治村の谷口館長らの働きかけによって、最終的には旧帝国ホテルの中央玄関部の移築を博物館明治村へ委任することとなった。

1.2 日本建築学会の動き

日本建築学会の主な動きとしては、まず1967年5月22日に「帝国ホテル旧館の保存に関する要望書」を帝国ホテルの犬丸徹三(1887-1981)社長宛に提出している。当初、この要望書は剣木亨弘(1901-1992)文部大臣や美濃部亮吉(1904-1984)東京都知事らを訪問した上で公表される予定であったが、突然中止された。そして、その後も学会内での意思疎通が図れずに、保存運動は後述する「帝国ホテルを守る会」が中心的な役割を担っていくことになる。その他の主な動きとしては、11

月6日に「現地保存が最適であり、また技術的に可能である」という意見書を剣木文部大臣、文化財保護委員会、犬丸社長に提出したほか、7月13日には「帝国ホテルの保存について」という座談会を開催しており、その出席者は、池辺陽(1920-1979)、稲垣栄三(1926-2001)、関野克(1909-2001)、高山英華(1910-1999)、前川國男(1905-1986)の5名で、司会は山本学治(1923-1977)が務めていた。

1.3 「帝国ホテルを守る会」の動き

雑誌『新建築』1967年9月号には「発足した「帝国ホテルを守る会」と題された記事が確認できる。それによれば「帝国ホテルを守る会」は著名な建築家や作家、歴史家等の23人が発起人となって1967年7月18日に発足された団体で、12月5日に博物館明治村に中央玄関部の移築を委任するまでの間、保存運動の第一線に立っていた団体であり、なかでも池辺陽、稲垣栄三、天野太郎(1918-1990)、沖種郎(1925-2005)、桐敷真次郎(1926-2017)、奥村昭雄(1928-2012)らが中心となって活動を行っていた。「帝国ホテルを守る会」の主な活動は、多方面に保存運動の働きかけを行うとともに、各地の街頭での署名運動の実施、「帝国ホテルを守る会ニュース」という冊子の発行を通して、世間に旧帝国ホテルの解体に対する警鐘を鳴らしたりした。また、7月27日には当時の佐藤栄作(1901-1975)総理大臣、福永健司(1910-1988)官房長官、中曽根康弘(1918-)運輸大臣、剣木文部大臣、美濃部都知事に保存の要望書を提出して協力を要請した。同会が重視したのは「旧帝国ホテルの現地保存」であった。しかしながら、この目的を達成するためには建物自体の老朽化や資金の面からも難航を極めた。その結果として旧帝国ホテルの解体を免れることは出来ず、最終的には博物館明治村に移築を容認せざるを得なかった。

なお、これらの活動の最中、ライトの最後の妻であったオルギヴァンナ・ロイド・ライト(1898-1985)が、タリアセンのスタッフ達と1967年10月22日から10月29日まで来日しており、10月25日に開催された講演会では、桐敷真次郎や三沢浩(1933-)らと旧帝国ホテルの保存問題に関する講演を行い、旧帝国ホテルの保存を訴えるとともに、剣木文部大臣や美濃部都知事やとも会談を行い、協力を取り付けることに成功した。その後、佐藤総理大臣が11月15日に行った記者会見の中で旧帝国ホテルの価値を認め保存に対して前向きな姿勢を見せたが、11月21日の記者会見では「建物の一部でも「明治村」にでも引き取ってもらえばいいだろう」と語った。この発言が博物館明治村への移築が決定する非常に大きな要因になったことは明らかである。

1.4 博物館明治村の動き

当初、博物館明治村は、移築に要する費用が莫大なことや、直ぐに復元しなければならない建物が他に多く存在していたこと等から、旧帝国ホテルの移築に対しては難色を示していた。しかし、解体工事が進む1967年12月26日に谷口吉郎館長が佐藤総理大臣と面会し、政府協力の条件の下で博物館明治村への移築を受け入れることを決定した。そして直後の12月28日に「博物館明治村建築委員会」が開催され、旧帝国ホテルの中央玄関部を博物館明治村へ移築することが決定された。

1.5 各大学の動き

早稲田大学は、株式会社帝国ホテルから旧帝国ホテルの実測調査を唯一許されていた。明石信道の記した当時の日記には、「最終的に写真約3,720枚、スケッチ約600枚、実測図面約60枚を記録した」とある。早稲田大学中央図書館には、後述する解体時の記録写真や実測図面が現在も保存されている。なお、解体時の記録写真については後述する。

東京大学では、当時太田博太郎研究室の助手であった福田晴虔(1938-)が『朝日ジャーナル』の1967年6月4日号に「帝国ホテルの保存」という論考を発表した。これは都市における場所の記憶と都市構造との関連性から旧帝国ホテルの価値を論じたものであり、このような学術的な論考が基礎

となって、その後の「帝国ホテルを守る会」の発足へとつながっていくこととなった。

東京芸術大学では、奥村昭雄と永橋為成(1937-)らが中心となり1967年9月28日に教官有志92名によって「旧帝国ホテル保存に関する声明書、要望書」を発表し世論へのアピールが行われた。

1.6 工学院大学武藤研究室による実測調査

前述した雑誌『新建築』での特集記事の一つ、沖種郎の「帝国ホテル旧館第3次保存運動」には「数年前から工学院大学の自主研究の形で実測が行われ、主な断面図がすでに作製されたが、詳細な記録はないので今後写真測量技術を用いて正確な実測を計画しなければならないはずである。」と記されていた。そこで、当時の関係者について調査した結果、アルヴァ・アアルトのもとで建築を学んだ武藤章(1931-1985)の奥様である

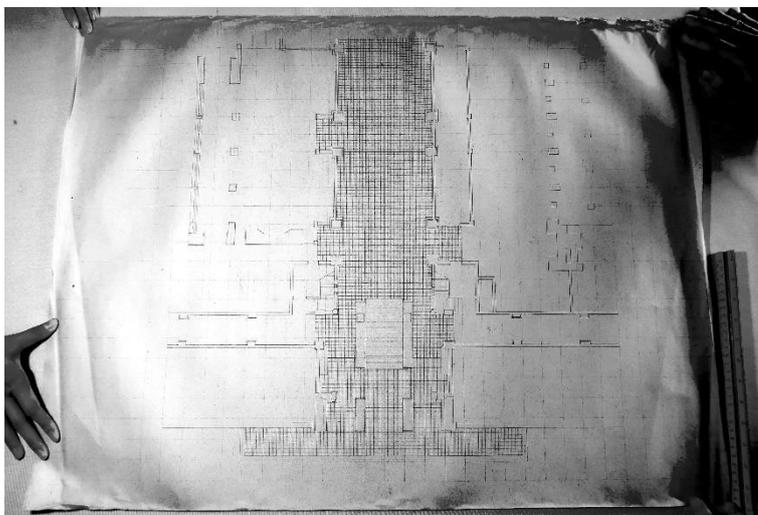


写真1 工学院大学による旧帝国ホテルの実測図面の一例

武藤敦子氏とご息女の武藤かおり氏へのヒアリング調査によって、工学院大学武藤章研究室の学生達が実測調査に携わっていたことが分かった。武藤邸では旧帝国ホテルに関する42枚の青焼き図面が確認されたが、いずれも作図途中の段階の実測図面であった(写真1)。なお、『新建築』1967年12月号には武藤研究室作成とされた断面図が掲載されているが、同図面は含まれていなかった。

このような資料の確認とともに当時の調査背景を探るため、武藤章研究室の学部4年生として当時実測調査に携わっていた中村勝氏へのヒアリング調査を実施した。その結果、この実測調査は武藤研究室の5名が卒業論文の一環として1965年度に実施していたもので、実測調査はその後1967年度まで3年間継続されたこと、東京芸術大学の奥村昭雄研究室と共同で行われていたことが分かった。なお、先に述べた早稲田大学明石研究室が行った実測調査とは関係を持っていない。当時の工学院大学にはフランク・ロイド・ライトのもとで旧帝国ホテルの設計に携わった遠藤新の弟子である樋口清(1918-)や、タリアセンでライトに師事した天野太郎が在籍していた。このことが、工学院大学が旧帝国ホテルの実測調査を実施に至った要因であると推察される。さらに、本調査が解体の発表以前より行われていることから、保存運動を発端とした他の運動とは異なり、むしろ旧帝国ホテルを純粋な研究対象としての興味に基づいた活動として考えられる。

2. 解体時の記録写真について

次に、明石信道らの活動によって撮影された解体時の記録写真について述べる。同資料は現在3つの箱にまとめられて早稲田大学中央図書館に保存されており、写真は「紙焼き写真」「アルバム」「ネガ」の3種類の状態で収められていた。なかでも、アルバム化された写真は、明石信道研究室によって調査後にまとめられたものであり、調査者の意図が含まれる貴重な資料である。そこで、まずこのアルバムの整理と検証に着手した。なお、これらのアルバム化された記録写真の総体は表1の通りで、アルバム化されていた写真は、全21冊のアルバムに紙焼きの写真は1,395枚、ベタ焼きは1,327枚、それぞれ収録されていた。

表1 アルバム化されていた写真資料の一覧

No	アルバムの表題 (表紙に記入されていた内容)	写真 (枚)	ベタ焼き (枚)
1	LOBBY : 1	89	0
2	LOBBY : 3 (外+内)	54	0
3	LOBBY : 5	102	0
4	LOBBY : 6	144	0
5	31 : BRICK TILE	63	0
6	32 : 石	42	0
7	33 : 石	40	0
8	34 : 石	19	0
9	20 : Pencilock内部構造_西北・北・北東_Reception	94	0
10	22 : 南客室棟・北棟一連・小塔	103	0
11	23 : 北客室棟・小塔・グリル入口	78	0
12	24 : 北棟・窓・庇・立面補足	75	0
13	25 : 北棟・腰石・屋根腰石	87	0
14	26 : 客室棟・廊下・建具・家具・隠れ造型・スラブ→	105	0
15	27 : 客室構造・スラブ・売店・南棟解体・客室改構_とりこわし	96	0
16	29 : 杭_EX・JOINT→被害	73	0
17	I・M・H Film原簿 : I	0	638
18	I・M・H Film原簿 : II_Colowr	21	582
19	I・M・H Film原簿 : IV	0	107
20	ETC : 1	47	0
21	3 : MAIN ENT. (B)/POND. STATUE. IMH	63	0
	合計 (枚)	1,395	1,327

2.1 アルバム写真資料の整理

以下の方法で、写真の整理を行った。なお検証を行うにあたっては、アルバムの写真1枚毎に番号を付与した上で、①写真番号、②写真サイズ(縦(mm)×横(mm))、③写真種別(外観・内観・部位)、④撮影箇所、⑤撮影部位、⑥撮影者の位置、⑦撮影時期(解体前か解体中)、⑧写真上の記述の有無、⑨記述内容(左記⑧で記述有りの場合)、⑩その他気づいた事柄の10項目についてリスト化した。

2.2 アルバム写真資料の検証

次に、リストに基づきアルバム写真資料に関する検証を行った。まず写真サイズは、最小のものは縦92mm×横24mm、最大のものは縦153mm×横225mmとバラつきが見られた。これらは、一部の写真について、整理に際し不要な部分をカットして、トリミングが行われているためであり、そのため写真のサイズが統一されていなかった。写真種別は、主なものとして「外観」が436枚、「内観」が172枚、「部材」が354枚で、その他にも部分的な写真のために判別出来ないものもあったが、外観写真が約7割と圧倒的に多数を占めていた。撮影箇所は、主に「正面玄関」と「北客室棟」が多数記録されており、内観としては「正面玄関」や「大食堂」の大谷石等の部材の装飾が多く、客室内では解体前の備付家具のみが記録され、客室内で使用されていたと思われる家具は別に記録されていた。また、撮影箇所ごとに分類された上でアルバムとして整理されていたが、同じページに配された写真にも撮影時期は混同している場合も見受けられ、数枚の写真をつなぎ合わせて構成されている写真もあった。これは、パノラマのアングルや見上げから見下げまで等、1つの連続した場面として残したい場合に用いられていることが分かり、後述するアルバム作成の意図として考察した。撮影部位と撮影者の位置については、周辺の建物や同じ頁に収められている写真から特定することが出来た。また、写真には直に数字やアルファベットなどの情報が記述されているも

のが見うけられた。同じ数字が記されている写真を見比べてみると、同じ撮影箇所または同じ撮影部位が多いことが確認でき、写真を整理するために記されたものであることが分かった。しかしながら、数字が記されている写真でも取消し線で訂正されているものも幾つか見受けられたため、写真上の記述の意味については今後さらに検証を要する。

2.3 写真のレイアウトにみるアルバム作成の意図

先述したように、アルバムは撮影日順ではなく、撮影対象ごとにまとめられていた。つまり、その記録の態度から調査者である明石信道研究室の関心は、工事の経過ではなく、旧帝国ホテル自体の記録に向いていたと言えるだろう。そのための方法として、具体的には3種類の記録の方法（①2枚以上の写真を組み合わせることによる連続した記録、②2枚以上の撮影対象との距離を変えた細部と全体の記録、③工事前後の写真を並置し意匠・構造を相互に見せるもの）が取られていた。

この記録手法の特徴は、同時期に記録された博物館明治村による記録写真と比較することで、より浮かび上がる。同館には、移築の決定後に、前述の「博物館明治村建築委員会」の委員でもあった、飯田喜四郎氏によって撮影された現地での記録写真が残っており、この記録写真は、「様式保存」という方針のもとで行う移築のための事前調査のために撮影されていた。これらの記録写真には、それぞれの写真にキャプションがつけられており、実測の記録だけでは残すことのできない、主に大正期の施工がいかに行われているかにむしろ焦点が当てられていると言えるだろう。こうした他のアルバムと比較すると、明石信道研究室は意匠に着目し、その記録のためのアルバム作成に注力されていると考えられ、それは、これらの調査が最終的には明石信道著の『旧帝国ホテルの実証的研究』として、その意匠設計に着目した書籍が出版されるという事実からも窺うことが出来る。

3. まとめ

旧帝国ホテルの保存運動については、団体ごとに経過を整理するとともに、その中で当時の工学院大学の実測調査の状況が確認され、当時の大学の体制との関連を窺うことが出来た。前述したように現時点では一部の青焼き図面が発見されたのみで、実測担当者の氏名や寸法の記述が無いため不明な部分も多いため、今後も資料調査を継続し3年間の調査の全貌を明らかにしたい。アルバム化された記録写真については、全写真の整理を行ったことによって全貌を明らかにするとともに、アルバム化の方法等から明石信道の意図を把握することが出来た。こうしたアルバムの性格からも、明石信道研究室による調査は、他の団体における保存運動とは一線を画すものであったと言えるであろう。

謝辞

本研究に関する調査に際しては、元博物館明治村の飯田喜四郎様と西尾雅敏様、武藤章の親族である武藤敦子様と武藤かおり様、福田晴彦様、阿部幸正様、前野堯様、中村勝様、早稲田大学中央図書館、博物館明治村にご協力をいただいた。ここに感謝の意を表する。

（発表論文）

大内田史郎，本橋仁，中川武：「保存運動の経過と残された記録資料に関する考察－旧帝国ホテルの解体から移築に関する研究（その2）－」，『技術報告集』，日本建築学会（※査読中）